
バカと少年とドタバタ生活

S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと少年とドタバタ生活

【Nコード】

N4289Y

【作者名】

S

【あらすじ】

二人の少年が居た。

一人は嘗ての自分を殺し生きている少年『吉井明久』。

もう一人は明久が嘗ての自分を殺す原因になった一つ『桐岡 隼人』。

二人は許し合うことができるのか？

二人の物語が今、始まる。

追伸 タイトルがどうも合っていないような気がします。気がしな
いでください。それともし、何か新しいタイトル候補があったらコ

メントくだせい。

ぶろろーぐ(前書き)

やってしまった……

つい、知り合いに『バカテスの二次創作も書け』と言われて書いてしまった……

既に『tinami』の方も合わせ八個も作品を投稿しているのに

……

八個も投稿しているので不定期になります。

それに計画性はまったくありません。

今から二人の過去を考えている位です。

それでも『バッチコピー!』と言うなら応援よろしくお願いします。

ぶるるーぐ

「吉井明久……」

俺を裏切りそして俺が裏切った男……
だから俺はあいつに嫌われている……
しょうがないんだ……

「でも……」

俺はあいつを嫌って無い。
もう許している……
だから……許してほしい……

「教えてくれ……明久」

お前はどうしたら俺を許してくれるんだ？
死ぬと言っんなら死ぬ。
だから許してほしい……
お前を裏切ったことを……許してくれ……
俺はそんなことを思いながらゆっくりと歩き出し
大勢の人混みの中に溶けて行った。

明久side

懐かしい夢を見ていた様な気がする。
そう……あれは……「俺」が死んだ時の記憶だ。
「俺」はあの時死んで「僕」になったんだ。
あいつが「俺」を裏切って「俺」があいつを裏切った。

だから、『僕』はあいつに嫌われている……

「教えてくれよ……どうしたら『俺』を許してくれるんだ？」

お前は どうしたら 『俺』を許してくれるんだ？

死ねと言っんなら死ぬ。

だから許してほしい……

お前を裏切ったことを……許してくれ……

『僕』はそんなことを思いながらゆっくりと目を瞑った。

ぶろろーぐ（後書き）

今日はこれとキャラクター紹介を投稿します。
これからよろしく願います。
では、また次回。

キャラクター紹介（と言ってもオリ主と明久の二人だけ）

『桐岡隼人』

本作品の主人公。

正確はクールだが実は優しい。

髪の色は黒髪。

自分自身の強さとしてはFFF団と戦っても余裕で勝って鉄人と良い勝負ができる。

召喚獣を使えば鉄人さえ余裕で倒せる。

召喚獣の服装は完全黒で刀とマシンガンと500点を消費して撃てるロケットランチャー。

因みにマシンガンは一回の召喚で百発しか撃てない。

因みに祖父が学園長の知り合いで隼人は召喚獣のデータ採取の為にとも召喚獣を扱っていた。

データ採取の際に特殊なテストを受けていて点数がリセットされていない。（明久も同様）

試験召喚実習の授業は適当な理由をつけて全て休んでいた。

理系に関してはスーパーコンピューターが十年かかると言われた計

算を五時間で終わらせた。

他の教科でも天才で勉強しなくても全教科600点以上は取れるが
組み分けテストの時に気分が悪く欠席した。

『吉井明久』

本作品のもう一人の主人公。

相当優しいが自分のこととなると超鈍感。

嘗て自分のことを『俺』と言っていた。

隼人並に天才だったが、あることが切欠でその時の自分を『殺した』

隼人と同じくらい喧嘩が強いが本気は余程のことが無い限り出さない。
い。

瞬間記憶能力者の為記憶教科では隼人に『記憶教科で明久に敵う奴
は居ない』と言わせる程。

一年生の頃学校では滅多にその才能を見せなかったが二年生になり
その才能を最大活用することにした。

召喚獣の姿は原作と同じく学ランだが武器は刀になっている。

隼人同様一年生の頃の試験召喚実習の授業は全て出なかった。

一話 クラス振り分けテスト（前書き）

こんにちわ！

何だか書きたくなって書きました。

後悔はしてません。

では、始まり！

一話 クラス振り分けテスト

僕はクラス振り分け試験を受けている。思っていたよりも簡単でびっくりした。

これならCクラス位にはなれる筈だ。

そんなことを思いながらシャーペンを走らせていると

ガタンッ！

そんな音がして何事かと思っただけで音のした方を向くと姫路さんが倒れていた。

「姫路さん！？」

僕は試験中であるにも関わらず姫路さんに近寄った。

そして姫路さんを抱き寄せて頭に手を乗せて体温を計る。

「暑い……」

熱がある。

四十度近くはある筈だ。

「保健室に連れていかないか……」

そう呟いて僕は姫路さんをおぶろうとするが

「試験途中での退室は無得点扱いとなるがそれでも良いかね？」

そんな監督官のセリフで止められた。

無得点？ふざけんな……！

「具合が悪くなってそれは無いだろう！」

僕はもうキレた。

僕はその監督官に掴みかかった。

監督官は表情を変えてこう言い放った。

「規則だ、仕方ないだろう」

……はっ。

そう言うことかよ。

何でも規則が大事ってか……

くだらねえ……

「姫路、今から保健室に連れて行くから少し耐えろよ」

僕は監督官を無視して姫路さんを背負う。
すると

「あき……ひさ、くん、駄目です。

それだと明久君が……」

苦しそうに姫路さんはそう言って来た。

もう忘れられてたかと思ってたけど覚えてたのか……

「良いよ、その位。大したことじゃないから」

そう言って試験会場の出口に向かう。
すると

「もう一度警告する。席に戻れ」

監督官が席に戻る様に言ってきた。

この試験管、ホント殴っても良いんじゃないか？

そう思うが殴ると問題になって姫路が悲しむから口だけにするか。

「黙ってる、この人形が」

そう一言言い放って僕は試験会場から出た。

二話 クラス振り分けテストの結果

「お前達、遅刻だぞ」

校門の前でそう言って来たのは通称鉄人。
趣味がトリアスロンの化け物。

「お前、今失礼なことを思わなかったか？」

「いえ、別に」

おまけに人の心を読めるときた。
本当に化け物だろう。

「まあ、良い。受け取れ」

鉄人はそう言って封筒を渡してくる。
まあ、別に中身は見ても分かるんだけどね。

「吉井、お前残念だったな」

「別に良いですよ。あんな下衆が居る学校で頭を良くする気なんて
なくします」

僕はそう言いながら封筒を開ける。

そこには『吉井明久 Fクラス』と書いてあった。

僕はそれを見て鉄人に向かってこう言った。

「あなたが学園長だったらまだ我慢できましたけどね」

「吉井……」

この人の熱意は本物だ。

多分学園長のババアにも抗議をした筈だ。

でも、学園長はそれを一蹴しただろう。

僕はそんなこと思いながらFクラスの教室へと向かった。

Fクラス教室

僕達はFクラスの教室に来ただけど僕は困惑している。

何故かと言うとFクラスの設備が原因だ。

今、僕達はこの教室に着いたばかりで少し見たただけだけどここホントに学校？

って思うくらいひどい。

窓ガラスは割れて黒板もボコボコ。

椅子も無い。

これは本当にひど過ぎる。

それに……

「おい、さつさと入れ」

何で雄二がここに居るんだ？

『元』神童の筈なのに。

「今、すごく失礼なことを思われた様な気がするけど気にしないで
おこつ。」

早く入れ」

「……雄二、何やってるの？」

多分、雄二がこのクラスの代表なんだろう。
何たって『元』神童だからな。

「俺がこのクラスの代表だ」

「……やっぱりか」

まあ、何でも良いや。

そんなことを思っていると先生らしき人が教室に入ってきた。

「取りあえず座ってください」

僕達はそう言われて席に着いた。

「二年F組の福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生は黒板に名前を書こうとするが……チョークすら用意されてなかったからやめた。

「皆さん全員に座布団と卓袱台は用意されていますか？不備があれば申し出てください」

最悪の設備だ……

これが最悪のクラスの不遇か……

「先生！俺の座布団綿があんまり入ってません！」

「我慢してください」

代え位用意しようよ……

「では先生！『では自己紹介を始めましょう』え？無視ですか？」

すると、教室の扉が開いた。

どうやら遅刻者が居たらしい。

遅刻者は二人らしい。

俺はその二人の顔を見て驚いた。

一人はAクラスでも上位に入っているだろう少女。

『姫路瑞希』

クラス全員が何で彼女がここに居るか理解できないだろう。

だが、真に僕が理解できていないのはもう一人の方。

嘗て彼に逆らう奴は一人残らず体をスタスタにされ

全世界の裏社会の人間から恐れられた『鬼神』

「桐岡隼人……！」

何で奴がここに……！

嘗て僕を……いや『俺』を裏切り『俺』が裏切った男。

そんなことを考えているとあいつは『俺』を見てそして驚いた顔をした。

「……………！」

口が動いて何か言っていたが聞こえなかった。
でも、何を言っているかは分かった。

『吉井明久……！』

こう言ったんだろう。
これからどうなるんだ……この学園生活は……

隼人 side

「吉井明久……！」

何で奴がここに居る！？
奴の学習能力ならばAクラスなんて余裕でなれた筈だ。
なのに何故……なのに何故だ！？

「二人共、自己紹介をしてください」

担任らしい人がそう言う隣にいた女子が自己紹介を始める。

「姫路瑞希です。
よろしく願います」

小柄な体を更に縮こめるようにして姫路と名乗った少女はそう名乗った。

まるで何処かのお姫様の様だ。
すると生徒の一人が手を上げた。

「質問です！どうしてここに居るんですか？」

普通に考えればクラス振り分けテストでそう言う成績を取ったと言
うのが答えだろう。

だが、どうやらこの女子は相当優秀らしい。

「テストの時に高熱を出してしまって……」

身体が弱いらしい。

それであのクソババアがFクラスに落としたと言う訳か。しょうがないと言えばしょうがないだろう。

「では、桐岡君、自己紹介をお願いします」

「桐岡隼人。」

趣味は特にない。

試験の時に体調不良の為休んだ。

それだけだ」

俺が名乗ると生徒が騒ぎ出す。

『おい、確か桐岡隼人って……』

『ああ、かつて仲間をボコボコにされた恨みで一つのマフィアをぶっ潰した男だって聞いたぜ』

『俺は全世界の裏社会から恐れられてるって聞いたぞ！』

『何でそんな奴が……』

どうやら噂は尾を引いているらしい。

俺はそこまで怖くない。

それにマフィアじゃなくてアメリカの暴走族の間違いだ。

「では、二人共席に着いてください」

そう言われて適当に席に着く。
すると自己紹介が再開された。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

あいつ女か？

それとも男か？

良く分かんらん。

「……………土屋康太」

結構物静かだな。

「島田美波です。

趣味は吉井を殴ることです」

おいおい……………明久も随分厄介な奴に狙われたな……………

「吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでください」

『『『ダーリイイイイツン！』『』『』』

明久は遂にそつち系の奴等に狙われたか……………
そんなことを思っていると赤毛の男が立った。
どうやらあいつが最後までらしい。

「坂本雄二だ。よろしく頼む」

それだけで終わっただと思ったが終わりでは無いらしい。
坂本はこう続けた。

「お前等、この教室の設備を見る」

そう言われて生徒全員が設備を見る。

これが設備なのか疑わしいところだ。

「この設備に不満は無いか？」

『『『大ありじゃあああつ!!!』』』

魂の叫びだな。

一瞬割れてない窓が揺れたぞ。

「これは代表としての提案だが……」

そこで一端きり野性味満点の笑みを見せ坂本はこう言った。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思っ」

これから二年F組としての俺のドタバタ学園生活が始まった。

三話 勝てる根拠

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

坂本がAクラスへの宣戦布告をするとクラス中から悲鳴が上がる。

『勝てる訳が無い』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんが居たら何も要らない』

そんな既に勝負を諦めている悲鳴。

悲鳴を上げていないのは宣戦布告をした坂本だけだ。

確かにAクラスに対し俺達Fクラスが試験召喚戦争を仕掛ける等愚かな行為だ。

だが、俺は坂本の目に確かな自信がある様に見えた。

「勿論、勝てる要素はある。

おい、康太。畳に顔を付けて姫路のスカートを覗くな」

「……！（ブンブン）」

変態かあいつは。

「は、はわっ」

姫路はスカートの裾を押さえて遠ざかった。

すると土屋は顔に付いた畳の後を隠しながら檀上へと歩き出した。

「土屋康太。こいつがあムツリーニの寡黙なる性識者だ」

聞いたことがある。

保健体育では異常な点数を取りその名は男子から畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を以って上げられる伝説の男。

「姫路のことは説明する必要も無いだろう」

確か……入学して最初のテストで二位を記録したって言う奴だよな？
因みにその時は俺は面倒だったから本気を出さなかった……

「木下秀吉だって居る」

あいつのことも聞いたことあるな。
姉のこととか演劇部のホープだとか。

「当然俺も全力を尽くす」

確か小学生の頃坂本雄二とか言う奴は神童だって良く父親が言っていたな。

あいつが……

気が付くとクラスの士気は上がっていた。

「それに、吉井明久だっている」

そして一瞬で下がった。

あいつ……この学校で本気を出していないんだな。

「何で僕の名前を出したのさ！言っとくけどそこで興味無さそうにしてる鬼神桐岡隼人の頭脳は
スーパーコンピューター以上だからね！」

明久がそう言った瞬間教室内の視線が一気に俺に集まった。
明久め……余計なことを……
ちよっと仕返ししてやるか……

「瞬間記憶能力者が言うか……」

俺がそう言った瞬間一気に教室内の視線が明久に集まった。
ザマ見る。

『てか、明久と桐岡って知り合いだったのか？』

『明久が瞬間記憶能力者だったら何で成績が悪いんだ？』

『スーパーコンピューター以上とかすごいな』

そんな声が上がっているが今は無視で良いだろう。

話も後で聞ける筈だ。

そう思って俺は傍観することにした。

「さて、予想外のことが色々あったが明久にしてもらおう」

「ねえ、下位クラスの使者って大体酷い目に遭うよね？」

確かにその通りだろう。

坂本の今の言葉は処刑宣告に等しい筈だ。

「安心しろ明久、そんなの小説や映画の中だ。

それにお前は強いんだから大丈夫だ」

勉強の方は本気は出して無かったが喧嘩での本気は出したのか。
あいつは一年の頃どんな学園生活を送っていたんだ？

「しょうがないな……分かったよ」

明久はそう言っ頭を掻きながら教室から出た。
それを見て俺も自分の席から立ち上がる。

「おい、桐岡。どこに行くんだ？」

坂本に呼び止められ俺は坂本の方を向いてこう答えた。

「明久が心配だからな。」

俺も着いて行ってやるうと思っただけだ」

俺はそう返事をして教室が出た。

四話 試験召喚戦争の始まり

今俺と明久はDクラスの教室へと向かっている。

こいつに着いてきた理由は島田が心配していたのもある。

だが、着いてきた一番の理由はそれじゃない。

一番の理由は話がしたかつからだ。

「何でお前はFクラスに居るんだ？」

それが一番気になっていたことだ。

こいつは本気を出せばAクラスになど余裕で行けた筈。

それどころか学年主席も夢じゃない。

なのに何故Fクラスに居るのか。

俺は不思議だった。

「僕は嘗ての『俺』を殺したんだよ」

成程な……だからこいつは……

「で？お前、彼女は出来たか？」

「な！？なななななな、何を言っただ！？」

「まだか」

昔はナンパを良くしていた癖に。

今は奥手になっただんだな。

「何かいらつくんだけど？」

「知らん、それより開くぞ」

取りあえず明久は置いという俺達に課せられた使命を達成することに集中することにした。そして、俺はDクラスの教室の扉を開けた。

「失礼する」

「失礼します！」

どうやら明久は復活したらしい。

Dクラス全員が俺達の登場に驚いている。

「な、何だてめえら！」

一人の男子が俺達に向かって怒鳴る。

俺達の迫力に押されているのか声が震えている。

「僕達FクラスはDクラスに午後には試召戦争を仕掛けます！」

明久がそう言った瞬間少しの沈黙がその場に流れ

「」「生意気よ(だ)！」「」

そんな怒鳴り声がその場に鳴り響いた。

俺と明久は廊下に飛び出た。

流石に学園で問題を起こすのは不味いからだ。

「こんなの久しぶりだよね！」

明久は逃げながらも笑いながらそう言っただけだ。

「そうだな、少し楽しいな」

俺達は楽しそうにFクラスへと向かう。

そしてFクラスの前になって明久は扉を開け放つ。

それを見て俺は明久の首を掴み後ろに投げ先に入る。

そして、明久の方を向きこう言った。

「俺の勝ちだぞ、明久」

俺がそう言うと明久は立って悔しそうな顔をする。

「最後のは卑怯だつて〜〜！」

「お前が全て読み切れなかったのが悪いんだ」

俺はそう言いながら坂本に近づく。

そして俺は拳を固めながらこう言った。

「坂本、遺言は聞いてやる。

誰かに言いたいことがあったら俺が伝えてやるぞ。

何かあるか？」

坂本はその言葉を聞いて顔を蒼くして後ろに下がる。

俺もそれを見て一歩前が出る。

「た、助けてくれないか？」

俺はその言葉を聞いて明久の方を向く。

その問いに僕は親指を立てて答える。

「パンを奢ってくれ」

パンツ！

頭に手刀を食らわされた。

そのやり取りに姫路さんが首を傾げてこっぴど尋ねてきた。

「吉井君ってお昼食べないんですか？」

「いや、食べてるよ」

その僕の答えに隼人が横槍を入れてくる。

「お前の主食は砂糖と水と塩だろうが」

「それだけでも十分さ！」

その僕の答えに灰になっている雄二以外頭に手を当てて呆れた。皆どうしたんだろう？

「話が逸れたな。試召戦争の話をしよう。」

おい、坂本。灰になってないで話をしろ」

隼人……それは酷だよ……

「さて、まずここに居る奴等が持っている疑問を解決しよう。まず、何故最初にDクラスを狙うのかだ」

「あ、ああ、まず、クラスの連中に召喚獣の扱いを慣れさせたいから。」

次に打倒Aクラスの為に必要なプロセスだと言う二つの理由だ」

でも、それって……

「でも、Dクラスに負けたらお終いじゃない」

そう、Dクラスは僕達よりも上のクラスだ。

勝てる確率は少ない。

でも、その島田さんのセリフに雄二は笑って答えた。

「負ける訳がない。俺達のクラスは最強なんだからな」

そのセリフは何も根拠の無いセリフだったけど何故かその気にさせる不思議なセリフだった。

「作戦を話すぞ、良く聞け」

僕達は春風が吹く屋上で勝利の為の作戦に耳を傾けた。

五話 Dクラス対Fクラス

明久side

「吉井！渡り廊下で木下達が戦闘に入ったわよ！」

そう言つて島田さんが前線の状況を報告してくる。

僕は耳を澄ませて前線の状況を探る。

因みに僕は中堅部隊の隊長だ。

『くそ！やはり点数の差がある！』

『押されてるぞ！もっと頑張れ！』

『補習室なんかに行つてたまるか！』

どうやら状況はあまり芳しくないらしい。

そう思つて僕は隼人から渡されたインカムで隼人に連絡を取る。

「隼人、今から僕達は前線の援護に行く。

遠距離から援護してくれ」

『了解、死ぬなよ』

「僕を誰だと思つてるんだ？」

『そうだったな』

隼人のその言葉を聞いて僕は部隊の皆の方を向いた。こう号令した。

「全員突撃しろ！」

その号令と共に皆全力で戦場に向かう。

すると秀吉が前で戦っていた。

秀吉の表情から戦死寸前だと言っていることが分かる。

そんな秀吉が二方向から攻撃を仕掛けられていた。

「隼人！右を頼む！」

パアアツン！

僕がインカムで隼人にそう言った瞬間そんな音が鳴り秀吉の召喚獣を右から攻撃しようとしていた召喚獣に穴が開き戦死した。流石隼人だ。

仲間がいきなり戦死したのを見て左側の召喚獣が戸惑い始める。

秀吉までもが戸惑ってチャンスの際に攻撃出来ていない！

「サモン試獣召喚！」

僕の声に呼び声に応じて召喚獣が現れる。

僕の召喚獣は一瞬で秀吉の近くの敵の傍に移動し頭を持って地面に叩きつけ鳩尾を殴る。

すると敵の召喚獣が消えた。

これで二人の敵を補習室に送った。

「吉井！五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴等、化学教師を連れて来たわ！」

見ると確かに二年生化学担当の五十嵐教諭と布施教諭が渡り廊下に居た。

連中、学年主任だけだと時間がかかるから立会人を増やして一気に

勝負を付ける気か！

「島田さん、化学に自信は？」

「全く無し、六十点台常連よ」

しょうがないか……

島田さんを補習室に送る訳にはいかないし……

「取りあえず、学年主任の所に行こう」

「高橋先生の所ね？了解！」

何とか敵に見つからない様に移動する。
すると

「あっ、あそこに居るのはFクラス的美波お姉様！五十嵐先生！こ
つちに来ててください！」

「くっ！ぬかつたわ！」

Dクラスの敵が走ってこつちに近づいてくる。
このままじゃ島田さんが補習室に送られてしまう。

「島田さん！行ってくれ！僕が何とかする！」

「何言ってるの！無理に決まって『うるせえ！さっさと行け！』！
？」

「俺が負けると思ってるのか！俺は負けねえ！だから行け！」

「……補習室に行かないでよ！」

そう言っつて島田は移動しようとする。
ふっ…… ホントらしくねえ……

「お姉さま！逃がしません！」

そう言っつて島田をお姉さまと呼んでいる女子が島田を追おつとする。
その前に俺は刀を構え立ちふさがる。

「隼人、島田のフォロー頼む」

『了解だ』

「邪魔をする人は殺します！」

そう言っつて女の召喚獣は俺の召喚獣に斬りかかるが……

「遅い……」

がら空きの身体に刀を滑り込ませる。
刀は敵の召喚獣の鳩尾にヒットした。
すると敵の召喚獣は消え去った。

「そ、そんな！圧倒的すぎます！」

「見るよ」

俺は召喚獣の頭上に表示されている点数を指す。

そこにはこう表示されていた。

『Fクラス	吉井明久	VS	Dクラス	清水美春
化学	750点	VS	DEAD	』

「750点!?何でそんな人がFクラスに……!」

「西村先生!よろしくお願いします!」

俺がそう言つとどこからともなく鉄人が現れた。

「おお、清水か。来い、補習漬けにしてやる」

そう言つて鉄人は清水とか言う女子は補習室に連れて行った。

「吉井明久!覚悟してくださいね!」

色々危険なことが聞こえたが無視しよう。
そんなことを思っていると

『（ピンポンパン）連絡いたします』

ん?何だ?須川か?

『船越先生、船越先生』

船越つて数学の……

『吉井明久君が体育館裏で待っています』

は？

『教師と生徒との垣根を越えた話しがしたいそうです』

あのクソ野郎！

「隼人、俺は一端抜ける！頼めるか！？」

『一端Fクラスの前線の奴等を伏せさせる。

後はアサルトライフルの状態をセミオートからフルオートにして敵を一掃する』

「了解！Fクラス！一端伏せる！とんでもない攻撃が来るぞ！」

俺が召喚獣を伏せさせてからそう言うのとFクラスの召喚獣と生徒が一度伏せる。
すると

パパパパパッ！

そんな破裂音共にDクラスの召喚獣に次々と攻撃が当たる。

「おっと、こんな物見てないで須川を死刑にするか。

つてこれじゃ昔の俺は死んだとか隼人に言えないじゃないか」

でもそんなことは関係ねえ。

俺はそんなことを思いながら放送室に向かい須川をボコボコにした。その後戦況は隼人のおかげでD組はボロボロ。

姫路がD組代表にトドメを刺してこの戦争は俺達の勝ちに終わった。

六話 Dクラス戦闘後

Dクラスとの戦争後、須川をボコボコにした後
僕はDクラスの教室に引き摺ってここ、Dクラスの教室に居た。
雄二はDクラスの代表と話している。

「明久、そんなに怒ってやるな。勝つ為に必要だったことだ」

隼人はそう言いながら僕の肩に手を置いた。

隼人が言いたいことは分かる。

あの放送は先生達を騙す為の物だ。

その位のこととは分かっている。

でも……！

「相手が船越先生だと言うことと呼び方が問題なんだよ！」

船越先生は婚期を逃してついに、生徒達に単位を盾に交際を迫るようになつた先生だ。

須川をボコボコにした後に船越先生に会いに行つて誤解を必死に解いてい無かつたら

今頃僕の貞操は……！

考えるだけでも恐ろしい……

そんなことを考えているとDクラスの代表と話を終えた雄二が近づいてきた。

「坂本、話は終わったのか？」

「ああ、上手くいったぜ」

そう言つて雄二は親指を立てた。
恐らく何か交渉していたんだろう。
どんな交渉をしてたんだろう？
僕は気になって尋ねてみる。

「どんな交渉をしてたの？」

「俺が指示を出したらBクラスの室外機を動かなくてして欲しいと言つたんだ」

確かスペースの関係で間借りしている物の筈だ。
多分Bクラスとの戦いの作戦で必要になるんだろう。
そんなことを思っていると皆帰る準備を始める。
それを見て僕も帰る準備を始める。

「あの、明久君……」

帰る準備をしていると姫路さんが廊下から声をかけてきた。
僕は呼ばれた通り姫路さんに近づいた。

「どうしたの？」

そう言つと姫路さんは胸ポケットから一枚の折りたたまれた紙を渡して僕に渡して来た。

姫路さんは僕に目で広げる様に催促した。
僕はその通りに紙を広げた。
紙にはこう書かれていた。

『あなたのことが好きです』

見間違いだと思って僕は目を擦ってもう一度確認する。
そこには間違いなくこう書かれていた。

『あなたのことが好きです』

これって僕に対して？

いや、ちよつと待てや。

おかしくないか？

何で俺なんかに？

つと、いつの間にか俺口調になってた。

「これ、本気？」

「はい」

その目を見て嘘を言っている様な物では無いことが一瞬で分かった。

本当ならここで即答しなくちゃいけないんだろっけど……

「今はまだ答えることは出来ない」

僕は……俺は首を横に振りながらそう答えた。

「何でですか？他に好きな人が？」

「いや、居ない。」

でも、まだ答えることは出来ないんだ」

俺はまだやらなくちゃいけないことがある。

それをしていないのに誰かと付き合うなんて出来ない。

俺は紙を渡してこう言った。

「まあ、もしかしたらいつか俺の方から告白するかもしれないけど……」

「そうですねか……でも、私は絶対に諦めませんから」

そう言っつて姫路は帰って行った。

「告白されたか」

「うわぁっ!」

心臓が止まるかと思った……

もしかしてこいつは俺を殺したいんじゃないんだろうか……

「そこまで驚くことは無いだろう。」

人を幽霊みたいに……全く」

「気配が無い所からいきなり声をかけられれば誰でも驚くだろうが」

「それは悪かったな。」

で？告白されたのか？」

「ぐっ!」

話しを逸らそうと思ったのに……!

今更話を逸らしても遅いか……

素直に話す他無いな……

「ああ、告白されたよ」

「そうか。」

なら、それだけだ」

隼人はそう言いながら踵を返して去って行った。

ホント……言わなくても心の内を分かってくれる友達って居ると嬉しいもんだな……

「さて！明日も頑張ろう！」

僕はそう言って家路についた。

七話 Bクラス戦（前編）

Dクラス戦の翌日僕達はBクラスを相手に試験召喚戦争をしている。最初は隼人がBクラスの前線にマシンガンを撃つてたけど一日に百発しか撃てないから弾切れを起こした為今は接近戦闘を行っている。僕や隼人は圧倒的にBクラスよりも点数が高いけど周りの仲間はBクラスよりも圧倒的に点数が低いから次々に補習室接問室に送られている。

「明久！ここは一端引いた方が良い！何故だか分からないが総司令塔の姫路から指示が来ない！」

「ここは回復試験を行った方が良い！」

「分かった！殿は僕がやる！教科選択をやってくれ！」
サブジェクトセレクト

『教科選択』
サブジェクトセレクト

隼人が持っている『光の腕輪』の能力。
ランダムで一つの教科の点数を半分にする代わりにフィールドの教科を自由に選べる。

「分かった！教科は？」

「日本史で！」

「任せろ！教科選択！日本史！」
サブジェクトセレクトジャパニーズヒストリー

隼人がワードを言うとフィールドが日本史に変わった。

「明久！」

隼人は腕輪を僕に投げ渡すと撤退していった。
Fクラスの皆も撤退していく。

『敵は吉井一人だ！一人だけだったら俺達にも勝ち目はある！』

『一斉攻撃だ！』

『やれええええつ！』

Bクラスの生徒が僕の召喚獣に襲い掛って来る。

さて、突然だが僕が日本史を選んだ理由を説明しよう。

この学校のテストの教科は現文、古文、数学、日本史、世界史、化学、物理、生物、保健体育の九教科。

僕が普通に試験を受けると総合教科で約8000点。

一番高い点数は日本史だ。

勿論それだけでは僕だけで殿はやらない。

僕だけでやった理由は勿論ある。

その理由は日本史の点数だ。

その点数とは

『Fクラス 吉井明久

日本史 2000点』

『『『な、な、な、何だつてええええええええつ！？』』』

そう言うことさ。

僕は日本史が圧倒的に他の教科よりも高い。
だからこそ僕は殿を務めたんだ。

「さあ、始めよう」

遊びをね……

隼人 s i d e

「こんなの誰が……」

クラスの誰かが呟いた。

もしかしたら俺が呟いたのかもしれない。

何故なら……卓袱台や鉛筆がボロボロになっていたから……

「根本の野郎だ！間違いない！」

確かに根本の奴は勝つ為ならば何でもすると噂で聞いた。

だが根本は今Bクラスの教室に居る筈だ。

こんな真似は出来ない。

他に根本と通じている奴がやった筈だ。

一体誰が……！分かった。

「坂本、根本には確か彼女が居たな？C組代表の」

「あ？ああ、でも、それが……あ！」

「やられたな……」

その彼女を使ってC組の奴等に根本が指示をしたんだろう。

何て外道な奴等だ……！

良いことを思いついたぜ。

「木下、お前にはAクラスの姉貴が居たな？」

「む？それがどうかしたかの？」

「坂本、女物の制服を調達しろ」

「は？そんな物……成程」

坂本も俺の考えに気が付いたのかニヤリと笑った。
さて、CクラスとBクラスには敗北の屈辱をくれてやるっ……

Cクラス前

俺達はCクラス前の廊下に居た。
作戦としては木下にAクラスの姉貴の演義をさせてAクラスにCクラスをぶつけて
Cクラスにこれ以上馬鹿な真似をさせないようにするということだ。
それで木下が先程入ったのだが……

『静かにしなさい、この薄汚い豚ども！』

始まったか。

しかし『豚ども』とは……言い過ぎの様な気が……

『アンタ、Aクラスの木下ね？ ちよつと点数が良いからっていい気になってるんじゃないわよ！ 何の用よ！』

これはCクラスの代表だろうか？
声からして怒っているな。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ 貴方達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！ 言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？』

誰もFクラスが豚小屋とは言って無いだろう……
実際豚小屋並に汚いが……

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟してなさい。近いうちに私達が薄汚い貴方達を始末してあげるから！』

そう言っつて木下が教室から出て来た。

『皆！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

よし、ひかかったか。

木下も中々やる。

「よし、お前等戻るぞ」

その言葉にその場に居た全員が頷いた。

さて…… 一気にBクラスとの決着を付けるかな……

俺は気付かぬ内に口の端を吊り上げた。

七話 Bクラス戦（前編）（後書き）

11/24

隼人の腕輪の名前を付け加えました。

八話 Bクラス戦（中編）

僕はやるべきことをした後Fクラスの教室でお茶を飲んでいた。

「ふう………」

お茶が美味しい……

やっぱりお茶は日本茶に限るな……

「お前は何してるんだ？」

そんな声がしたかと思いきや、声がした方を向くとそこには秀吉や雄二や姫路さんや美波、そして隼人も僕のことをジト目で見ていた。

「隼人、これありがとう」

そう言っただけで隼人に光の腕輪を投げ返す。隼人はそれを取って自分の腕に付けた。

「それで？お前は何をしているんだ？」

「日本茶飲んでる」

「パソコン！ザスッ！」

「うぎゃあああああつ！目が、目があああああつ！頭も痛いいいいっ！」

正直に言ったのにこの扱いは何だよ！

僕が何をしたんだ！

「お前は馬鹿か！Bクラスが攻めて来たらどうするんだ！」

「頭は良いのに何で行為は馬鹿なのよ！」

そう言いながら僕に更なる追撃をかけようとする美波と野獣。それを止めているのは隼人と秀吉。

「イタタ……大丈夫だよ、やるべきことはやったから」

目を押えながら僕はそう言った。

その言葉を聞いて皆は首を傾げている。

「吉井君、やるべきことと言つにはどう言つことですか？」

「え……とね……」

約一時間前

今は前線の部隊の部隊を倒した後。

後残っているのは教室に居る部隊だけ。

「さてと……Bクラスの教室に乗り込むかな？」

僕はそう呟きながらBクラスへの教室へと歩き出した。

Bクラス教室

『吉井だ！打ち取れ！』

Bクラスの教室に入った瞬間そんな号令が聞こえたかと思うと一気にBクラスの皆の召喚獣が僕の召喚獣に襲い掛った。

「遅い！」

光の腕輪が起動している限りフィールドは日本史になる。
この学園において僕に日本史の点数で勝てる者は居ない。

『Fクラス 吉井明久 VS Bクラス 全員
日本史 2000点 VS 2000点』

今Bクラスで戦える人数が大体十人位だから一人2000点位かな？
いくら数で来ようが今の僕の状況は2000点の人達と十回戦うだけ。
そんなの苦ではない。
むしろ……楽しい位だ。

「さあ……かかってきなよ……遊んであげるから……」

『『『（ゾクッ！）』』』

時は戻りFクラス教室

「とまあ、そんな訳で根本君以外の戦力を補習室拷問室に送って帰って来

たよ」

Dクラスに室外機を壊させたのが無駄になったけどそこら辺は許してくれると信じている。

「……鬼だな」

なんて失礼な。

僕以上に優しい人はこの世に存在しないと言っのに。

「で？卑怯で下衆でこの世に存在しない方が良い奴ナンバーワンの根本はどこに居るんだ？」

「まだ戦力はあるけど召喚獣を召喚される前に縄で縛って気絶させたよ」

仮にもFクラス代表の雄二と話をさせる前に逃げられたらたまった物じゃないからね。

と言っか雄二も人のこと言えないじゃないか。さりげなく根本君を侮辱してるし。

「そうか、なら行くぞ！Bクラスの教室へと！」

「「「おおー！」」」

雄二の号令で僕たちはBクラスの教室へと向かうことになった。でも、その時僕は知らなかつたんだ。

それが……かつての『俺』を起こす結果に繋がることを……

九話 Bクラス戦（後編）

僕達はBクラスの教室に西村先生を連れて居る。
そこに居たのは僕が縄で縛った根本君。

「何で亀甲縛りなんだ？」

「そこは気にしないで」

後女子の三人（秀吉含む）は何で顔を赤らめないで。

「まあ、野郎が縛られてる所なんて見ても気持ち悪いだけだから解くぞ？」

そう言つて隼人は根本君の縄を解く。

それより野郎が縛られてる所は気持ち悪いってことは女なら良いのかな？

「さて、根本恭二、お前に保健体育勝負を申し込む。
試獣召喚^{サモン}」

「くそがああああつ！試獣召喚^{サモン}！」

『Fクラス 桐岡隼人 VS Bクラス 根本恭二
保険体育 750点 VS 203点 』

お互いの召喚獣が現れ点数が表示された瞬間隼人の召喚獣が根本君の召喚獣を斬り裂きBクラス戦は
終結した。

……が

「てめえらあああつ！絶対にゆるさねからな！まず最初に姫路！これが何だか分かるよな！」

「！」

根本君が一枚の紙を出した瞬間姫路さんの表情が硬直した。まさかあれは……僕に告白した時の手紙！？
落としたのを取られたのか！

「Fクラスを負けるようにしろって言ったのに無視しやがったな！？」
こいつをコピーして学校中にばらまいてやるよ！」

こいつ……！姫路さんを脅迫しやがったのか……！
そう言う思考に至った時僕の……俺の『何か』が弾けた。

第三者視点

根本が『学校中にばらまいてやるよ』そう言って少しするとBクラス
の教室内にとてつもない殺気が
放たれた。

その殺気は負の感情全てを含んだ様な不快な殺気。
この殺気を感じた時隼人は驚愕の表情を浮かべた。
それは殺気に驚いた訳ではない。
いや確かに殺気に驚いたと言うのは事実だ。
隼人が驚いたのは殺気を放った人物だ。

「明久……？」

隼人が明久の方を向くと明久は俯いていた。そして明久が顔を上げるとそこには『かつての明久』が本気で怒った時の顔があった。

「根本くうううん、何てこと言うのかなあ？」

明久の顔は……笑顔。

だが、その笑顔は楽しい笑顔では無い。

狂気を纏った笑顔だ。

その顔を見た瞬間根本は悟った。

『俺は怒らせてはならない奴を怒らせた』と

明久はゆつくりと笑いながら根本に近づく。

誰も止められない。

雄二も、姫路も、島田も、土屋も、秀吉も、西村も隼人すらも全員止められない。

ただ嫌な汗を掻き明久を見ているだけだ。

見ていたくは無い。

でも、目をそらせられない。

あまりの圧力で顔すらも動かせないのだ。

「いけないことだよねええええ？脅迫って言うのはさああああ」

「く、来るな！来ないでくれ！」

根本がそう言っても明久と根本の距離は少しずつ狭まっていく。動けない。逃げたいのに逃げられない。

隼人はその光景を見て昔のことを思い出していた。

かつて明久は仲間不良が手を出した時こんな風に怒っていた。

その時の不良は全員もうこの世には居ない。
このままではあの時の様になってしまう。
その考えに至った時明久は拳を振り上げていた。
それを見て隼人は動いた。

「はあっ！」

「ぐっ！」

隼人は明久を壁に吹き飛ばした。
常人ならば気絶する程の拳。
だが明久が気絶したことは無かった。

「いつたいなあああ……隼人、何するんだよ？」

明久はゆっくりと立ち上がる。

その顔は今だ狂気を纏っているが先程よりも狂気は薄くなった。

「お前にこれ以上暴力を振わせる訳にはいかないんだよ」

隼人はそう言って身を低くし一気に明久に近寄る。

狙いは人体の急所。

急所を狙って短時間で決着を着けようとしているのだ。

だが、明久もそこまで甘くは無い。

一撃一撃を防御しながら反撃をする。

実力はほぼ同じだ。

だが、明久は怒りで冷静が出来ていない。

だから、隼人が生み出している隙があると気付かない。

「はあっ！」

明久は隼人がわざと生み出している隙を突く。
隼人はこれを待っていたのだ。

いつもの明久ならばこの隙は不自然だと気付く。
だが、冷静でない明久ならばこの隙を突く。

そう思つて隼人はわざと隙を作つた。

隼人は拳の勢いを使い一本背負いを使い明久を投げた。

明久を投げた後隼人は明久の鳩尾を殴つてようやく明久を気絶させた。

「はあ……はあ……皆、明久を、保健室に、運ぶぞ」

隼人がそう言うと雄二達は頷いた。

隼人 side

保健室

「あれが昔のアキなの？」

保健室に明久を運んだ後少し落ち着いて島田はそう呟いた。
他の面子も俺を見ている。

俺は少し考えて答えた。

「あれは明久が本気でキレた時の明久だ。
あの明久を鎮めるには見た通り苦勞する」

「そう……」

その場に嫌な沈黙が流れる。
その沈黙がしばらく流れると

「んん……」

明久が気を取り戻したらしい。
明久は体を起して周りの様子を見る。
そしてこう言った。

「ここはどこだ？お前達は……誰だ？」

十話 二人の過去（前編）（前書き）

オリキャラ紹介

今回出てくるオリキャラを紹介します。

桐岡 佐波

隼人の姉。

医療に関することならば天才と言われ大病院桐岡病院の院長。
隼人が将来医者道に進むことを期待しているが隼人は断っている。

幸崎 美冬

明久と隼人がロサンゼルスであった少女。
明久が不良から助けた。

十話 二人の過去（前編）

ここは桐岡病院。

名前から察する通り俺の家が経営している病院だ。

明久が起きた後俺達はBクラスの外道代表と話を付けてここに来ていた。

「姉貴、どうだ？」

俺がそう尋ねたのは俺の姉貴「桐岡 佐波」

この病院の院長だ。

姉貴は動物と言われる類の物ならばどんな動物でも治せる医療の天才。

だから明久をここに連れて来た訳だ。

「あんた、予感はしてるんでしょ？」

「まさか……俺の勘は当たってるのか？」

俺の問いに姉貴は頷いて答えた。

「間違いないね。精神的な負担が来て記憶が欠落したんだよ」

「……………」

精神的な負担と言えば……本気でキレたことか。

あれ以外に精神的な負担は考えられない。

「治す為にはやっぱり普通の生活を送らせた方が良いか？」

「そうだね。良い刺激を与えてあげるとボンツと思いつ出すことがあるから。」

それと分かってるよね？」

「ああ、姫路には言わない」

もし、姫路に言えば姫路は自分のことを責める筈だ。そんなことを明久は望まない。

「それじゃな、姉貴」

俺はそう言つて扉を開けて部屋から出た。

「「「桐岡（君）！」「」」」

俺が部屋から出た瞬間坂本達が俺の周りに集まって来た。それ程明久の診査結果が気になるんだろう。

「明久は普通の生活を送つて良いそうだ。何か良い刺激を与えてやると良いらしい」

俺はそう言いながら近くのソファに腰掛ける。すると、坂本が言い難そうにこう言つて来た。

「明久の昔のことを教えてくれないか？」

「昔？中坊の頃のことか？」

坂本はその問いに頷いて肯定する。

「……俺達は明久の昔のことを知らない」

「ムツツリー二の言う通りなんだ。

姫路も小学校の頃を知ってるけどあんな風になったことは無いって
言ってる。

だから知りたいんだ」

「教えて、アキは中学生の頃はどんなだったの？」

「教えてください」

四人の顔は至極真面目。

興味本位で聞いている訳じゃないと分かる。

「分かった。少し長くなる、座れ」

俺がそう言つと四人共ソファに腰掛ける。

俺はそれを見て話始めた。

中学二年の頃のあの頃ことを……

隼人達が中二の頃ラスベガスのあるカジノ（日本語でお送りします）

「ロイヤルストレートフラッシュ」

俺はそう言つて五枚のカードをその場に置く。

相手の顔が蒼白になっていくのが分かる。

「ガキ！イカサマをしただろう！」

そう言っただけ相手は俺に指差してイチャモンを付けて来た。これでもう十回負けてるからな。

イカサマだと言いたくなる気持ちは分からなくもない。だが、真面目にやってるこちらとしては言われたくないセリフだ。

「そうやって言い訳するのはやめてもらおう。

この結果は実力だ。そもそもここがどんな場所か」

実はこのカジノは裏カジノ。

イカサマをしたらその場で男だろうが女だろうが良く分からない場所に連れて行かれる。

更にこのディーラーは特殊な訓練を受けたスペシャリスト。イカサマをしたら絶対にバレる。

「ディーラー！このガキはイカサマをしてないのか！」

今度はディーラーに文句を言い始めたか。

どれだけ俺がイカサマをしたと思いたいだ。

「していません、このお方は実力であなたに勝っています。

これ以上騒がれると他のお客様のご迷惑になりますので、『特別処置』を取らざるをえなくなりますのでご注意ください」

「っ！」

ディーラーが『特別処置』を取ると言った瞬間男は静かになった。

まあ、俺でも静かになるだろうな。

そんなことを思っている

「隼人、どれ位稼いだ？」

そう言って手に多くのコイン入れを持って来たのは明久だ。こいつもこいつで別のゲームで稼いでいた。

「これ位だ」

俺はそう言っただけで成果を見せる。

成果を見ると明久は感心して口笛を吹いた。

「もう良いだろ。さっさと出ようぜ」

明久はそう言っただけで出口へと向かった。

その後俺達は出口近くで換金してカジノから出た。

ラスベガスの道

「しかし、あのオッサンうるさかったな」

明久はそう言いながら金の入っているアタッシュケースを振りまわしている。

……今、アタッシュケースが頭を掠めた。

「しょうがないだろう。あのオッサンはこちら辺でも有名な奴だったからな。」

それとお前、アタッシュケースを振りまわすのをやめろ。

当たり前が悪かったら死ぬ」

「あ、悪い」

そんなやり取りを取りながら俺達は歩く。

ここから宿泊先のホテルまでそんなに時間はかからない。

夕食までには帰れる筈だ。

そんなことを思っている

「やめてください！（英語）」

そんな叫び声が聞こえて来た。

その声の方を向くとそこには一人の少女が五人の不良に絡まれている光景があった。

「はあ……ああいうの見てると不愉快だな……これちょっと見てくれ」

明久はそう言ってアタッシュケースを置いて不良達の方に歩いて行く。

一分も待てば……

「このガキ覚えてろ！（英語）」

とまあ、負け犬の出来上がりだ。

明久は絡まれていた少女を連れてこっちにやって来た。

「隼人！この子日本人だつてよ！」

あいつ……そんなことを大声で言わなくても良いだろうに……

「えっと……助けられてありがとうございます。」

『幸崎 美冬』って言います(ニコ)「」

俺はその時、幸崎に対して抱いた感情に気付かなかった。

十二話 二人の過去（中編）（前書き）

十一話 二人の過去（中編）

「あー！そう言えば……」

自己紹介をして幸崎を家まで送っている途中明久が何かを思い出した様な顔をしてズボンのポケットを探り出した。

そして、メモ帳を取り出し何か書いて一ページ分を破り『お前も書け』と言いながら俺に渡した。

そこに書いてあったのは明久のメールアドレスと電話番号だった。

俺は自分のメールアドレスと電話番号を書いて明久に渡す。

明久はそれを見て確認して幸崎に渡した。

「これ、俺と隼人のメルアドと電話番号だから良かったら登録して」

「クスクスッ」

明久の言葉を聞いて幸崎は小さく笑った。
まあ、しょうがないだろう。

「明久、そのセリフはナンパみたいだぞ」

俺は顔に手を当てて呆れながらそう言った。

そこで明久はようやく気付いたのか慌ててメモを引込めた。

「ごめんごめん、そうだったね」

だがそのメモを幸崎は明久から奪い取った。

「登録しとくよ。今日は本当にありがとう。」

私の家ここだから」

幸崎はそう言って微笑んで家に入ろうとする。
明久はそれを呼びとめた。

「明日、プロツケンイーグルスってチームの試合があるんだけど俺、その試合に出るんだ！
場所はここから一番近くの広場で時間は十時からだから！
良かったら来てくれ！」

幸崎は微笑んで頷いてた。
それを見た明久は微笑んだ。

翌日

カキイイッン！

そんな快音が鳴り響きボールが場外にまで飛んで行く。
バッターの明久はそれを見て一気に走る。

「あれ？桐岡君？」

そんな声が後から聞こえて後を向くと幸崎が意外そうな顔をして立っていた。

「何だその『吉井君が出てるんだから桐岡君も出てると思ってたんだけど？』と言いたそうな顔は」

「すごい！当たってるよ！」

あまりはしゃぐことでもないと思うんだが……

「それで？何で出て無いの？見た限り桐岡君も運動神経抜群だと思っただけど？」

「確かに野球は出来るがめんどくさいんだ」

明久から良く誘われているが余程の暇が無い限り誘いには乗らない。

「あははは〜めんどくさいか〜」

そんなこと言っただけ吉井君は怒らないの？」

「その程度ではあいつはキレないさ」

明久をキレさせたいのならば余程のことをしなければならぬだろう。

それ位あいつは優しい。

と、そんなことを思っていると

『ゲームセット！』

ピッチャーの明久が敵チームの最後のバッターから三振を奪いゲームを終了させた。

「吉井君すごいね〜」

「あいつはプロ野球チームからスカウトを受けているんだ。あれ位当たり前だろう」

そのチームの名前は忘れたが相当有名な野球チームだった様な気がする。

そんなことを思っていると着替えてきた明久がやってきた。

「待たせて悪いな。帰ろうぜ」

「うん、勿論送ってくれるよね？」

「お嬢様の仰せのままに……」

明久は頭が良いくせに偶に馬鹿な行動を取る。

「じゃあ、行こうか！」

幸崎の号令(?)で俺達は歩き出した。

この日常が壊れる事件が近付いているのに気付かないまま……

十二話 二人の過去（後編）（前書き）

思ったよりも早く投稿出来ました。

過去編終了です。

どうぞ〜

十二話 二人の過去（後編）

俺達と幸崎が会ってから一カ月程が経った。

俺は彼女と会っていない間ずっと彼女の事を考えていた。

彼女の純粹な笑み、闇を知らない純粹な瞳、俺は彼女に惚れている。最初に会った時は気付かなかったが最近になって気付いた。

だが……

「よっ……ほらよっ……っしやあああっ！ラスボス倒したあああ
あっ！」

彼女は明久に惚れている。

彼女が明久と話している時彼女の目が変わることに最近になって気付いた。

それを気付いたのが俺が抱いている感情に気付いたのと同じ日だった。

「隼人！どうだ俺のゲームの腕は！」

明久はそう言いながらその場でクルクル回っている。

あいつが何でそこまで喜ぶのか分からない。

「明久、お前、自分の好きな奴が親友のことを好きだったらどうする？」

聞いてから俺はしまったと思った。

『何でそんなことを聞くんだ？』と聞かれたらどう言えば良いのかを考えていなかった。

だが、そんな心配をよそに明久はこう答えた。

「そうだな……俺の場合好きな奴を応援するかな？」

「諦められるのか？」

「好きな奴が幸せになれるなら良いさ。

え！？このゲーム裏ボスとか居るのか！？

攻略してやる！」

明久はそう言っただけでまたゲームに集中し始めた。

こいつのゲームに関する集中力は大したものだ。

そんなことを思っていると

□ 〽 〽 〽 〽 …… 〻

明久の携帯が鳴った。

明久はゲームに夢中で気付いていない。

「明久、携帯が鳴ったぞ」

そう言っただけで俺は明久に向かって携帯を投げる。

明久はゲームを停止させて携帯を後ろ手でキャッチした。

明久は携帯を開いて操作し始めた。

メールを見ると明久はゲームの電源を切って立ち上がった。

「珍しいな、お前がセーブもせずにゲームを途中でやめるなんて」

俺が知る限り明久がセーブもせずにゲームを途中でやめることは無い。

途中でやめるにしてもセーブは必ずする。

晃久は出かける準備をしながらこう答えた。

「美冬からの呼び出しだ。

何でも二人きりで会いたいらしい」

そう言っつて明久は鍵を投げてきた。

「出かける時は戸締り頼むわ。
それじゃ」

明久はそう言っつて片手を挙げて部屋を出た。

俺は少しじっとしていたが何故かそのままではいられなくなり部屋から出た。

鍵を閉めて明久を追うこととしたのだ。

「何でこんなことを……」

そう呟いても誰も答える人間は居ない。

ただ、その呟きは街の喧騒に消えるのみ。

そんなことを思っていると明久と幸崎が合流した。
すると二人は何かを話し始めた。

「ここからでは聞こえないな……」

俺はそう呟き二人にバレない様にゆっくりと近づく。
するとようやく二人の会話が聞こえ始めた。

『明久君、来てくれてありがとう』

『別に良いって、それで用っつて何んだ？』

明久がそう尋ねると幸崎は少し間を置いてこう言った。

『明久君……私ね……明久君のことが好きなの！私と付き合ってください！』

「「！」「」

幸崎は明久に告白したんだ。

そう理解するのに十秒程かった。

明久から『クールスーパードンキー』とか言われている俺がだ。

分かっているもそれ位驚いた。

『それ……本気か？』

『うん』

そう返事をした幸崎の目は真剣な目だった。

それを見て俺は悟った。

彼女の意思は相当強く誰にも揺るがすことは出来ない。

俺は固めることが出来た。

幸崎を諦め、二人を応援するという意思を固めることが出来た。

俺はこれ以上盗み聞きをしまいと思いその場から立ち去ろうとする。
その時

『ごめん……その思いは受け入れられない』

「「！」「」

明久は幸崎の告白を断った。
しょうがないだろう。

誰にでも人の告白を断る権利は存在する。
だから俺は明久を責めることは出来ない。
そう思ったその時

『そ、そっか、しょうがないよね、あ、あれ？』

「っ！」

幸崎が涙を流したのだ。

いくら俺が冷静とは言え堪え切れないことがある。
好きな奴が涙を流せば冷静になれない。

その原因がたとえ……明久だったとしても。

「明久！お前女を泣かせるとはどう言うことだ！」

「隼人（君）！？」

俺は明久の胸倉を掴んだ。

明久と幸崎はまだ困惑している。

俺は本気で明久の頬を殴った。

「ぐはあっ！」

明久は俺に殴られながらも立ち上がった。

「隼人……いきなり何するんだ」

明久は俺に殴られたところを押えながらそう尋ねてきた。

俺はそう尋ねている間にも逃げて欲しかった。
俺は明久を傷つけたく無かった。
でも明久は逃げなかった。

「ぐあっ！」

今度は明久の鳩尾を蹴った。

何度も何度も明久を蹴ったり殴ったりしても明久は抵抗しなかった

……

「その後俺は警察に捕まり嚴重注意。

明久は全治五ヶ月の怪我を負い、
プロ野球チームからのスカウトは問題を起こしたと見られて中断された」

俺が話している間五人は静かに俺の話聞いていた。

「俺は日本に帰国した後、冷静に考えたんだ。
どうして明久が告白を断ったのかをな」

「それってただその幸崎って子以外に好きな人が居たんじゃ無かったの？」

「……ありえたこと」

土屋と島田の言葉に俺は首を横に振った。

「明久は公言こそしていなかったが幸崎に好意を持っていた。なのに明久は幸崎の告白を断ったんだ」

「ならどうしてですか？」

俺は姫路の言葉に少し間を置いてこう答えた。

「明久は俺の気持ちに気付いていたんだ。俺とあいつは長いこと付き合ってたからな。

俺が幸崎に対して好意を持っていたことに気付いていたんだろ。本来ならば明久が幸崎の告白を断った時にその考えに至るべきだったんだ。

なのに……なのに俺は……！明久の夢を奪ってしまった……！」

俺は流れる涙を止めようと目押えるがそれでも涙は止まらない。

俺はいつのまにこんなに泣き虫になっていたのだろうか？

そう思う程涙が流れてくる。

俺は涙を拭いこう言った。

「許されるとは思っていない。

だけど、俺は許されたいんだ。

また、あいつと昔の様な楽しい生活を送りたいんだ」

俺はそう言いながら立ち上がりゆっくりと出口に向かう。

「俺はもう帰る。明日な」

俺はそう言って家路についた。

十三話 Aクラスへの宣戦布告(前書き)

日本国憲法第76条『裁判官の職権の独立』について以下の()
に

あてはまる語句を記入しなさい。

『全ての裁判官はその() ()に従ひ() ()してその() ()
を行いひ、

この() ()及び() ()にのみ拘束される』

吉井明久・姫路瑞希・桐岡隼人の解答

『全ての裁判官はその(良心)に従ひ(独立)してその(職権)を
行いひ、

この(憲法)及び(法律)にのみ拘束される』

教師のコメント

大変良く出来ました。

吉井君もやれば出来る子だったんですね。

これからの吉井君に期待します。

坂本雄二の解答

『全ての裁判官はその(明久の解答)に従ひ(明久の解答)してそ
の(明久の解答)を行いひ、この(明久の解答)及び(明久の解答)
にのみ拘束される』

教師のコメント

君には期待しないことにします。

土屋康太の解答

『全ての裁判官はその（本能）に従ひ（脱衣）してその（全裸体操）
を行ひ、

この（現行犯により警察の手）及び（手錠）にのみ拘束される』

教師のコメント

全ての裁判官の皆様には誠意ある謝罪文を要求します。

十三話 Aクラスへの宣戦布告

小説本文 明久の見舞いに行った翌日。

俺は学園長室の前に来ていた。

ここに来たのは学園長とある話をする為だ。

俺は少し息を整えて扉を叩いた。

コンコン

「失礼する」

俺はそう言っただけ返事も待たずに学園長室に入る。

「誰だい礼儀知らずの……何だあんたかい」

忘れていた奴も居るかも知れないが俺の祖父はこのババアと知り合
いで良くこのババアは図々しく

『知り合いなら協力しな』と言って召喚獣のデータ採取の為に良く
協力させられていた。

因みに明久も同様だ。

「話があるが……少し待ってる」

俺はそう言っただけポケットに手を入れて球体状の機会を取り出す。

俺はその機会のスイッチを入れた。
すると

キューーーン……

そんな電子音が鳴った。
ババアは耳を塞いでいる。

「何だいその耳障りな音は……」

俺は機会をズボンのポケットに入れながら答えた。

「特別な電波を飛ばす装置だ。

半径百メートル以内の電子機器はこの装置が作動している間使えなくなる」

俺はソファに座りながら話を続ける。

何だか俺が悪役の気分だ。

「お前、最近白金の腕輪とか言う物を作っているらしいな」

「何でそれを！」

ババアは驚愕の表情で俺を見ている。

「本社の情報部の情報網をなめるな」

本社の情報部は政治家の不正の証拠の隠し場所やここ三年の海外の要人の来日日程、
更には世界の企業が五年間の内に出そうとしている商品の情報等も把握している。
学園長の隠し事等調べなくても入って来ることだ。

「その腕輪にはどうしても直せない欠陥まである様だな」

「そこまで知ってんのかい……それで私を強請ろってかい？」

俺はその質問に首を振る。

「そう言う訳じゃない。」

ただ、取引をしたいだけだ」

「何だつて？」

「ババアが訝しむのは無理もないだろう。」

「そもそも今、俺はババアを強請れる立場にあるのに俺はそれをしないんだから。」

「Aクラス戦で設備だけではなくあるものが欲しい。」

「そこで俺達がそれを得るのを了承して欲しいんだ。」

「了承すれば本社の全設備を使ってその欠陥を直してやる。」

ババアはそこで少し思案顔になってこう尋ねてきた。

「分かったさね、何が欲しいんだい？」

「俺が欲しいのは……」

Aクラス教室

「一騎打ち？」

ババアと取引が終わった後俺達はAクラスの教室に来ていた。ババアと長く話し過ぎた所為でAクラスへの宣戦布告の時間を過ぎたから坂本が心配して電話をかけてきたのだ。因みに携帯番号は明久の携帯を見たらしい。

「そつだFクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎打ちを申し込む」

今回の宣戦布告ではクラス代表の坂本、俺、姫路、明久、土屋、木下と

首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。

明久は記憶喪失なのに来て良かったのか？
因み対応しているのは木下の姉だ。

「何が狙いなの？」

「Fクラスの勝利以外何も無い」

そう言っても信じられないのは当然だろう。

下位クラスの俺達が学年主席の霧島に勝負を挑むと言つのはおかしな話だ。

それに一騎打ちに俺や姫路が出たらほぼ勝てるだろう。

ここは助けてやるか……

「一騎打ちは五回。三回勝った方の勝ちならばお前達にも問題はあ
るまい？」

「桐岡！？」

「坂本、少し黙ってる。」

教科の選択権はそちらに全てやるつ。

こちらには勝てる要素が山ほどあるからな」

「きりおじぶつ！」

いい加減うるさいので鳩尾に一発拳を入れてやった。

うるさいところになると言うことを少しは分かってくれただろうか？

「……………受けても良い」

「！」

今のは流石の俺も少し驚いた。

全く気配を感じさせないとは……………こいつは武芸の達人ではないのか？

「代表、良いの？」

木下（姉）の問いに頷きながら霧島はこう言って来た。

「その代り負けた方は勝った方の言うことを聞く」

「……………（かちゃかちゃ）」

土屋は何をしているんだ？

「分かった、勝負は十時から良いな？」

「……………うん」

不思議な雰囲気を持つてる奴だ。

「明久、教科書は全教科読んでおけよ」

「分かってるつての。さっき試してみたけど瞬間記憶能力はまだ消えて無いからな」

それは良い報告だ。

「お前等、戻るぞ」

俺達はFクラスの生徒に報告する為に教室に戻った。

十四話 AクラスVS Fクラス

Aクラス対Fクラスの開戦時間に俺達はAクラスの教室に居た。
Aクラスの方が広いからこちらで戦うことになった。

「では、両名共準備は良いですか？」

立会人はここ数日で世話になった学年主任の高橋だ。

あの女、実は少し抜けている所があると噂があるがあんな見た目ではそんなことはないと思う。

「ああ」

「……………問題ない」

両クラスのクラス代表がそう答えたことにより最初に戦う生徒が前
に出る。

あれは……………木下の姉か。

それに対してこちらが出るのは

「ワシが出よう」

その弟の木下秀吉か。

馬鹿め。ここで木下が出れば

「ところで、秀吉、Cクラスの小山さんって知ってる？」

やっぱりそうきたか……………

「はて、誰じゃ？」

しらを切ったところで誤魔化せる訳が無いだろうが……

「じゃあ、良いや。ちよつとこつち来て」

「ん？姉上、ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ？」

木下（姉）は木下（弟）の腕を引っ張って廊下に連れ出した。

『姉上、勝負は　　どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？　　どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしてる事になってるのかなあ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して

あ、姉上っ！　ちがつ……！　その関節はそっちには曲がらな
っ……！』

ガラガラガラ

扉を開けて木下（姉）が帰って来た。

さらば木下（弟）よ……お前のことは忘れない。

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりに人を出してくれ
る？」

「い、いや……ウチの不戦敗で良い……」

にこやかに笑いながらハンカチで血を拭う木下（姉）

木下（弟）には同情しよう……

「そうですか。それではまずはAクラスが一勝、と
軽過ぎる……軽過ぎるぞ……」

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 木下秀吉
生命活動 WIN VS DEAD』

まだ生きてるぞ。

ただ、死にかけているだけだ。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

物理か……理系だから俺が出た方が良いな。
坂本も俺を見ているし。

「俺が出よう」

俺はそう言って前に出る。

すると高橋は頷きフィールドを出した。

「「^{サモン}試獣召喚」」

幾何学的な魔方陣が現れお互いの召喚獣が姿を現し点数が表示される。

『Aクラス 佐藤美穂』

物理 389点

Aクラス内でも優秀な点数だろう。

まあ、得意科目を持って来ただろうから点数が高いのは当たり前か。だが……

「理系が得意なのは俺も同じだ」

「Fクラス 桐岡隼人

物理 2000点

『『『はあっ!?!?2000!?!?』』』

Aクラスから驚愕の声が聞こえる。

まあ、チートだからな。

「さて、さっさと終わらせようか」

俺はそう言っつて召喚獣にマシンガンを構えさせる。

召喚獣は引き金を引いて弾を発射させた。

パパパパパパッ!

「っ!」

かわしたか。

まあ、遠距離タイプの装備は複数の敵を倒す時の装備だからしょうがないな。

そんなことを思いながら召喚獣にマシンガンを捨てさせ刀を構えさせる。

そして、一気に距離を詰めさせる。
相手は間合いに入ったことで武器を振って来た。
そこで俺はその武器に向かい刀を振わせる。
すると

バキンッ！

「なっ！」

相手の武器が砕け相手が動揺する。
相手が動揺した隙を突いて相手の召喚獣を切り裂かせた。

『Aクラス 佐藤美穂 VS Fクラス 桐岡隼人
物理 DEAD VS WIN』

「勝者Fクラス」

俺はその言葉を聞きながら先程まで俺が居た場所に戻る。
さて、次は誰だ？

「三人目の方、どうぞ」

高橋にそう言われ土屋が立ちあがった。
失敗したな。ここでもし、対戦教科が保健体育でなかったらこちら
が負ける。

「じゃあ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは緑色の髪をショートカットにしたボーイッシュな女
子が出てきた。

一年の終わりに俺のクラスに来た工藤愛子じゃないか。

「一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。一応言っとムツリーニ君の知り合いだよ」

工藤が自己紹介を終えると高橋が工藤に尋ねた。

「保健体育でお願いします」

ああ、工藤は転校生だから土屋が保健体育が得意なのを知らないんだったな。

だが、何だろう、この嫌な予感は……

「ムツツリーニ君は知ってるよね？ボクも保健体育が得意だって。ムツツリーニ君とは違って……実技でね」

「(ぶしやあああああっー!)(」

土屋が勢い良く鼻血を噴き出した。いつもより量が多かったような気がする。

「あははは、ムツツリーニ君、ごめんね。」

……ムツツリーニ君？」

土屋は鼻血を噴き出してから動かなくなっていた。

俺は土屋の近くまで歩き脈を見る。

そして、教師の前だが構わず携帯を開き姉貴の携帯に電話する。

プルプルプル……

『あ、隼人？今、学校中でしょ？どうしたの？』

「姉貴、今すぐ学園に救急車を寄こしてくれ。」

俺のクラスメイトが血を出し過ぎてまずい状況なんだ。

一応、保健室に行かせる」

『分かった。少し待ってな』

ピッ

電話が切れて俺は一言。

「土屋を保健室に運んでくる」

俺は土屋を持って保健室に向かった。

途中、工藤が付いて来て何でも看病するらことを言ってきた。

保健室から帰って来た俺が見たのは姫路の召喚獣が相手の召喚獣を切り裂いている光景だった。

「明久、姫路の相手は？」

「何でも学年次席らしいぞ」

学年次席に勝つとは……

姫路もやるな……

「なあ、隼人」

「何だ？」

俺がそう聞くと明久は自分の方から呼んで来たくせに何だか言い難そうな顔になっていた。

「どうした？何を言われても怒らないから言ってみろ」

俺がそう言つと明久は覚悟を決めたようにこう言つて来た。

「俺、本当は記憶喪失になつてなかつたんだ」

「……は？」

こいつは今何と言つた？

記憶喪失になつてなかつた？

この野郎……！

「隼人！怒らないつて言つたよな！？」

「……そうだったな」

俺は明久に指摘され構えていた拳を引込める。

危うく明久を殴り殺しそうになるところだった。

「それで？何で記憶喪失だったふりをしたんだ？」

「記憶喪失だったらお前とまた仲良くやれるだろ？」

「お前……」

「でも、やっぱり何だか違う感じがしてよ。

こう言うのはやっぱり真正面から解決した方が良いと思ったんだ」

やっぱりこいつは……

「全然変わって無いな」

そう、昔から全然変わって無い。

こいつは昔のままだ。

「やっぱりお前と俺はまた昔の様に『教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！』！？」

小学生レベルだと！？

そんなの百点確実……いや！俺達が負ける！

「明久！坂本を気絶させるぞ！」

「は！？何でだよ！」

「日本史は記憶教科だぞ！勉強しなければ忘れて点数が下がる教科だ！

小学生の頃神童だと言われていたとしても中学生の頃に悪鬼羅刹と言われていた男が勉強していたと思っつか！？」

「あ、やっべ……走るぞ！」

今の状況は二対二の同点。

坂本が負ければ俺達の負けだ。

中学の頃真面目に勉強していなかった坂本に勝ち目等絶対はない。

「「坂本（雄二）！気絶しろおおおおっ！」」

「な！？お前等何をごふっ！ぐはあっ！」

まず、俺が坂本の鳩尾に一発、明久は俺と坂本を飛び越え坂本の首に手刀をくらわせた。

そして、坂本が倒れたのを確認して俺はこう言った。

「こちら側の生徒が倒れてしまったのでこちらは代わりを出そう。

明久、任せられるか？」

「了解！任せてくれ」

俺は気絶した坂本を背負いながらFクラスの集団の中に近付き坂本を置く。

すると姫路がこう尋ねてきた。

「何で坂本君を気絶させたんですか？」

こいつ、気付いて無かったのか？

島田も気付いてない様だし……はぁ……

「日本史は記憶教科だぞ。勉強しなければ忘れて点数が下がる教科だ。

小学生の頃神童だと言われていたとしても中学生の頃に悪鬼羅刹と言われていた男が勉強していたと

思つか？」

「「あ」「

「あのままやってれば俺達が負けていた。だから、俺達は坂本を気絶させたんだ」

俺はそう言いながらディスプレイを見る。すると、そこにはある一問が浮かびだされていた。

『（ ）年 大化の改新』

『『『うおおおおおっ！』『』』

教室を揺るがす様な歓喜の声。

一体何が起こったんだ？

俺が困惑していると姫路が説明をしてくれた。

「坂本君は昔大化の改新の年号を625年と嘘を教えたそうなんです。だから、この問題が出たら絶対に勝てるって言ってたんです！」

ほう……そんなことをしていたのか。

何と言うか……坂本は酷い奴だな。

まあ、それでも俺達が勝てるなら良いだろう。

そんなことを思っている間にもテストは終わりディスプレイの表示が変わった。

『日本史勝負 限定テスト 100点満点』

『Aクラス 霧島翔子 97点』

その点数が表示された瞬間Aクラス全員が驚愕の表情を浮かべたのが分かった。

さて、明久、お前の本気を見せてやれ。

『Fクラス 吉井明久 100』

『『『うおおおおおつ！』』』

教室を揺るがす様な歓声の声。

明久がAクラスの教室に入って来た。

俺は明久に駆け寄り

バチンッ！

お互いの手を叩きあった。

お互いの表情は笑顔だった。

十四話 AクラスVS Fクラス（後書き）

何か苦勞なくAクラスを倒しちゃいました。見せ場が無くてごめん
なさい……

十五話 Aクラス戦後

Aクラス戦が終わった後俺達は戦後対談をしていた。Aクラスのほとんどの生徒はうなだれている。学力最低クラスに負けたのだからそれは当然だろう。

「さて、交渉を始めようか」

「待て、坂本」

俺はゆっくりと先程復活した坂本に近づく。因みに気絶させた理由を説明したら許してくれた。

「桐岡、どうしたんだ？」

俺は教室の入り口を見る。

やっぱり居た……

「ババア、言う通りにしてもらっからな」

「分かってるよ……クソジャリのクセに」

最後の言葉は聞き逃してやろう。

一タつつこんでると面倒だからな。

「あ！妖怪ババア長！本当に学園長だったのか！」

「やかましいよ！この不良のクソジャリ！」

「何だと！？この見る耐えないババアが！」

「うるさいさね！不良のナンパクソジャリが！」

「何だと！？この見るに堪えない異臭を放つクソババアが！」

「うるさいさね！？この（ry）」

「何だと！？この（ry）」

「やれやれ……この二人は相変わらずだな……」

「あの桐岡君、明久君は学園長と仲が悪いんですか？」

「と言うかアキは記憶喪失なんじゃないの？」

「一気に尋ねやがって……」

「まあ、答えてやるか。」

「まず、姫路の質問だが相当悪い。」

「ババアの性格の所為でな。」

「次に島田の質問だが明久は俺と仲直りする為に記憶喪失を装ってたらしい。」

「あいつは全然変わって無かったよ」

「ババアと明久の喧嘩を見ながらそう言った。」

「あの二人はお互いを見た瞬間に喧嘩をするからなあ……」

「やれやれ。そろそろ止めるか」

そろそろお互いの罵倒が聞くに耐えない物になってきたからな。

「おい、明久、ババア、さっさと喧嘩をやめろ。
話が進まなくなるだろうが」

「ああ、悪い悪い」

「ふんっ！」

「やれやれ……ババア、本当に『AクラスとFクラスの併合』を
行してくれるんだろうな？」

「……ええっ!?!?!」

いたる所から驚愕の声があがる。
まあ、それは当たり前だろうな。
因みに明久は納得したような表情を浮かべている。

「俺達はこの戦争に勝ってAクラスの設備を手に入れる。
他のクラスはその設備を手に入れようとするだろう。
だが、俺達はFクラス、つまり学力最低クラスだ。
Aクラスが設備を取り戻しに来たら苦戦する。
だからこそその併合だ」

「併合すれば取り戻すことなんて絶対にならないからな。
流星隼人、クールスーパーコンピューターは一味違うな」

「誰がクールスーパーコンピューターだ。
ババア、教室の拡張工事は本社がやってやる。
人数分の設備も本社が用意してやる」

俺はそう言いながら携帯を開く。

「俺だ、始める」

『はっ!』

携帯の相手がそう答えた瞬間Aクラスの教室の扉が開き黒いスーツを着た男達が入って来た。

「紹介しよう。俺の祖父の会社の建築課のエリート達だ。

お前達!頼むぞ!」

「「「お任せください」「」

「と言う訳だ。今日は適当に解散で良いだろう?」

「良いさね、それじゃあ『今日は解散だ!』セリフを取るんじゃないよクソジャリ!」

「ああ!?!なんだと!?!」

やれやれ……

懲りない奴等だ……

「明久、少し付き合え」

「あ?ああ、分かったよ」

「坂本、島田、姫路、土屋、木下、お前達も着いてこい」

こいつ等には……見届ける権利がある。

「分かったがどこに行くんだ？」

「すぐ近くだ」

目的地に向かう間俺は何を聞かれても『すぐに分かる』としか答えなかった。

学園近くの廃ビルのある一フロア

「隼人、ここは一体どこなんだい？」（口調は来る途中に戻った）

そう俺に尋ねながら明久は辺りを見回している。

俺は質問には答えずフロアの中心に向かって歩いている。

「明久、俺はお前と同じく昔の様にやれたらと思っている。だが、俺達の間には何か蟠りがある。今日、それを無くしたいんだ」

その言葉で明久は理解したのか拳を固め始めた。そうだ、明久。

「それで良いんだ」

俺はゆっくりと拳を固め構えた。

「皆、見届けて。
僕達の物語を……」

「明久！頑張って来い！」

「アキ！頑張りなさいよ！」

「……頑張れ、明久……！」

「明久、頑張るのじゃぞ！」

三人の応援を聞いて明久はゆっくりと近づいてくる。

「待たせたな、隼人」

「準備は良いな？」

「ああ、行くぞ！隼人！」

「かかってこい！明久！」

お互いの拳が振われた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4289y/>

バカと少年とドタバタ生活

2011年12月27日23時50分発行